

(銀のエンジェル賞 中学生の部)

まっくらやみの家族会議

中三・富川 晴名

「これより、家族会議を始める：」

真夜中になり、ろうそくの火が、ポツ：ポツ：と、ともり、ボクの目がようやく覚めてきたころ、お父さんの低い声が、ひんやりとした、くらやみにひびきわたった。

その声を聞いて、大広間の大きなダイニングテーブルに、家族一同が集まってきた。

一番はじめにお母さんがやって来て、

「急に会議なんてどうしたんですの？」

その次にお兄ちゃんと、お姉ちゃんが、

「せっかくオレ、好きなバンドの新曲きいてたのに……」

「お父さんの話をちゃんと聞きなさい！」

と、またいつものケンカをしながらやって来ました。

「えっ？なんだろうね？」

「なんだろうね？」

と、顔を見合わせながら、仲良く手をつないでやって来たのが、ふたごの妹たち。そして、一番最後にのんびりやって来たのが、ボクだ。

「よし、みんなそろったな。今回の家族会議のテーマは、『家族の今後の生き方について』だ」

お父さんは、古い黒板にチョークで、カツカツ：音をたてながら

テーマを書き始めた。

「まあ、みんなの耳にも入っているだろうが：われわれの仲間一族たちが、つぎつぎと、人間に生まれ変わってきているそうだよ。」
えっ？人間に生まれ変わる？人間じゃないのか？って思ったでしょ。

「そうだよ！ボクたち家族は：実は、現代に生き残った『ヴァンパイア』なんだ。」

ボクたち一族は、ほこり高きドラキュラ伯しやくの末えいで、かつては、彼の活やくが伝説となり、人間たちに恐れられてきたんだ。

でも、昔とちがって今は、人間たちの生活が進歩してきて、ヴァンパイアにとって、何かと不便で生きづらい世の中になってきている。

そこで、ヴァンパイア協会が、困っているヴァンパイアたちの要望にこたえて、申し込むと、人間に生まれ変わるための説明書とキットを送ってくれるらしい：

「世の流れにのって、われわれ家族も、思いきって人間になろうと思うのだが、みんなどう思う？」

と、お父さんがいうと、みんなは、

「やったあ！」

と、大さわぎ。

でも、ボクは、

「今のままでいいんだけど：」
と、気まずそうに言った。

すると、お父さんが優しくボクに語りかけてきた。

「そくかく：でもな、人間になったら、血を吸わなくていいんだぞ。」

今どき、夜に黒い服でウロウロしていると、おまわりさんがやっ

てくるし、人に警戒いされて、血もなかなか吸えないだろ？

かといつて、蚊に変身して血を吸おうとすると、蚊取り線香つてやつにやられて、フラフラになる。

血を吸うのも、ひとくろろうで、もうこんな生活イヤじゃないか？」
ちよつと、マヌケな話だったけど、お父さんの眼は、真剣そのものだった。

「たしかにね…黒ばっかりじゃなくて、カラフルな服も着たいわ！お化粧する時も、わたしたちって、鏡にうつらないじゃない？ 口紅がうまく出来なくて、いつもはみ出て、困っちゃうの！」

と、お姉ちゃんは、ほおづえをつき、ため息まじりで言った。

「でもさ、血を吸えないのは大変だけど、ボクは特に行きたいところもないし、外に出なければ、かっこうなんて気にしないでいいだけじゃない？」

と、ボクは反論した。

「えーっオレは、ライブに行きたいよ。」

この前の晩、好きなヴィジュアル系バンドのライブに行こうとしたらさあ…みんな、十字架のペンダントつけていて、こわくて近よれなかったよ。」

と、お兄ちゃんは、興奮して立ち上がって言った。

お兄ちゃんに続いて、お母さんもおっとりした声で話し始めた。

「そうね、十字架もそうだけど、わたしたちって、ニンクも苦手よね。でもあれって、ほんとはおいしいらしいのよ。中華料理屋で、ニンクたっぷりのギョウザやラーメンを一度でいいから食べてみたいわ。」

と、幸せそうな顔で食べたいものを頭に思い浮かべているようだった。

そして、ふたごの妹たちも参加してきて、

「にんげんになったら、いきたいところあるよね〜」

「ひるまのこうえんにいきたいよね〜」

と言うので、なんで？と聞くと、

「かぞくみんなでピクニックに行くの。」

「ひなたぼっこしたり、ゆうぐであそんだり〜」

「みんなで、おべんとうたべてみたいなく〜」

「じゃ〜サンドイッチも、もっていきようよ。」

と、かわるがわるワイワイはしゃぎながら言った。

みんなが人間になりたいと、盛り上がっているのに、ボクだけ取り残されたようで悲しくなった。

「ボク：真っ暗でひんやりしたこの部屋がいごち悪いわけじゃないし、家族みんなが仲良しの今のままで、十分幸せなんだ〜」

と、小さな声でつぶやくと、ボクの気持ちに気づいたお父さんが、ボクの方にやってきて肩をポンツとたたいて言った。

「たとえヴァンパイアのままでも、人間になつたとしても、わしたち家族のきずなは、いつだって変わらない：人間になつたら、きっと家族みんなで楽しめることが、今よりもっとふえるよ。」

そうなれば、きつともっと幸せになれるはずさ：〜」

お父さんの言葉で、みんながこくりとうなづき、ボクも決心がついた。

さっそく申しこんだら、次の晩、ヴァンパイア協会から、コウモリ便で説明書と、満月の晩の儀式を行うためのキットが送られて来た。

今日は、儀式を行う満月の夜だ。ヴァンパイアでいる最後の晩なので、絵の上手なお母さんが、家族みんなの顔を描いた。

本当は、記念写真をとりたいたいところだが、ボクたち家族がヴァンパイアだったということを、何か形として、残しておきたかったのだ。

自分の顔が描けないお母さんの顔は、お母さんの次に絵を描くのがうまい、ボクが描いてあげた。

最後の晩さんは、本当は血のジュースといきたいところだが、用意出来なかったので、トマトジュースを飲むことにした。

成功をいのって：みんなで「カンパ〜イ!!」

そしてヴァンパイアの家族は、庭に出た。

青白く光る満月が灰色の雲から顔を出し、真っ暗な森からコウモリたちが夜の空へ羽ばたいていった。

お父さんとお母さんは、コウモリ便で送られてきた丸い魔法陣マトトをしき、説明書通りに、真ん中に満月をうつすように鏡をおいた。

それから、家族みんなで手をつなぎ、呪文をとえながら、まぶたを閉じグルグルと回った：

人間じゃないから心臓がないはずなのに、なぜかドキドキして、みんなは、それぞれの手を固くにぎりしめていた。

しばらくして、満月の光が、ものすごい勢いで、鏡の中に集まってきた。鏡に反射した白い光がキラキラと光り、ヴァンパイアの家族を包み、ボクたちの意識はだんだんと遠のいていった：

今日の天気は、快晴。

絶好のピクニック日和だ。

お母さんが作ってくれたサンドイッチを持って、みんなでおそろいの十字架のマークのTシャツを着て、緑がいっぱいの公園に出かけた。

このTシャツの十字架のマークは、ボクたちにとって、とってもおそろしいものだったけど、お兄ちゃんがカッコイイからって選んだんだ。

あれから、ボクたち一家は、人間として仲良く平和に暮らしている。ふたごの妹たちは、

「トモダチになりたいくて、かみつこうとしたら、いじわるはダメって、おこられちゃった。」

「にんげんって、やさしくすると、トモダチになれるんだって。」

「にんげんってむずかしいね〜」

「むずかしいね〜」

と、首をかしげて、かわるがわる言った。

お兄ちゃんも、沢山友達が出来たらしく：

「笑った時の八重歯がかわいって、女の子に言われちゃった！」と、うれしそう。

「人間でいるのも、いろいろ大変だけど、こうやってお日様の下で、ピクニック出来るって幸せよね。」

「体に血が通っているから、お日様の光があたたかいんだわ。」

と、お姉ちゃんとお母さんが言った。

ボクは、

「お日様の光って、まぶしくて、キラキラして：こんなに気持ちよかったんだ!!」

と言って、うでをグリーンと伸ばし緑の芝生にねころんだ。

そして、あたたかい陽だまりの中で考えていた。

人間は、生きていく上で、食べ物や服を買うにも、お金が必要。

ちよつとしたことで、風邪をひくし、ケガもする。（いがいと、イタ

イんだ!!）

どうしたら他の人間と仲良くやっていけるのか、なんだかんだ悩んだけど、今が楽しい。

レジャーシートをしき、ボクたちは丸く座りバスケットをおいて、お弁当を広げた。

お父さんは、ランチの前に、

「今までは、いつまでも続く永遠の命だと思っていたから気づかなかったけど、限りある命だからこそ大切に：そして、いまを精いっぱい楽しもう。いただきま〜す!!」

と言い、家族みんなで一度しかないこの命を大切にしようと、誓い合った。

家族会議では、ひとり反対していたボクだったけど、やっぱり人間になってよかったと、ハムサンドをほおびりながら思った。

ヴァンパイアだったころの、暗くてちよっぴりカビくさいあの家も、固くて冷たいかんおけベッドもなつかしいけどね。

たぶん今もあのヴァンパイアの家族が住んでいた古ぼけた家が、きつとこの世のどこかにあることでしょう。

気取ったポーズで並んでいる、立派なご先祖様たちの肖像画と、ヴァンパイアの仲良し家族の顔が描かれている、あの絵とともに：

誰にも知られず、真っ暗なやみの中にひっそりと：
